

第3回 鶴岡市文化芸術推進基本計画策定委員会 会議録

日時：令和2年2月18日（火）

午後2時～3時50分

会場：荘銀タクト鶴岡 会議室

[出席者]

委員：太下義之氏（アドバイザー）上野由部氏、東山昭子氏、酒井英一氏、後藤洋一氏、平智氏、佐藤豊継氏、黒澤由希氏

幹事：白幡俊健康福祉部長、佐藤正胤商工観光部長、鈴木英昭都市計画課主幹、尾形圭一郎学校教育課長 松浦幸子図書館長

事務局：布川敦教育長、石塚健教育部長、鈴木晃教育委員会事務局参事、佐藤嘉男社会教育課長、佐藤尚子文化主幹、三浦裕美文化財主幹、坂田英勝芸術文化主査、五十嵐恭子芸術文化主査

[公開・非公開の別] 公開 [傍聴者] なし

◆協議

【1】 前回の委員会の協議事項とその後の経過

【2】 第3回策定委員会への提案内容

- ① 過去から未来への見通しと計画の領域
- ② 現状の整理
- ③ 基本目標（今回は空欄）
- ④ 重点項目

【3】 その他

※閉会后「つるおか文化部ミーティング 文化芸術を活かした地域づくり」

【1】 前回の委員会の協議事項とその後の経過（事務局説明）

委員：アンケートの集計で高校生のスマホの利用時間が多いことをネガティブにとらえているようだが、高校生はスマホで勉強する人もいる。何に使っているのかを聞いてみるべきだ。

事務局：設問が実情に合わなかった部分もあったと思う。勉強や通学時間にスマホを使っているケースもあると考えている。

委員：若者がスマホを使う時間は大きい。どう許容していくかは課題になると思う。

委員：いろいろな視点から見たほうがいい。

委員：中央高校にお邪魔したとき、スマホ利用について先生方に聞いてみた。ゲームはほとんどなく、メールやラインでつながっていないと不安でそこに大方の時間が

いっていると言っていた。学校に入ったらスマホは禁止だという。

アンケート等では文化芸術を観光やまちづくりと関係が深いと答えた方が多いという印象を受けた。来年度、詩吟の全国大会が鶴岡であり全国からお客が来るし二日間が観光になる。ユネスコの食文化を味わってもらい三つの日本遺産を見て回遊してもらおう計画をしている。またここで暮らす人向けには芸術文化を進める時練習する基盤を想像している。

委員：文化芸術というジャンルの中で、鶴岡の文化とともに、外側からのものをどう融合させていくかという考えだと思う。それもこれからの課題になると思う。

委員：アンケートの利用は難しい。鶴岡の文化芸術に関して聞いても施設の利用の状況を答える人もいれば、壮大な哲学的なことを答える人もいる。この委員会で基本目標とか、重点項目とか少し絞り込んで、具体的な項目についてどうだということ。スマホも利用時間や利用内容より、スマホ自体を文化と考えるかどうか深い問いだと思う。

委員：公文大の意見で、銀座通りの DADA の利用状況はどうか、若者の場がないという意見があった。施設の現状から文化芸術へのアプローチ、イコール生涯学習や社会教育の視点、学びの場の設定の視点から盛り込むような計画もあるのか。社会教育施設の現状から踏まえた部分をどうとらえているのか。若者の場がないことに中央公民館は設定できるのか。福祉の視点では、若者の力は地域を活性化させるととらえている。バンドを組んでも演奏する場がない。それを行政で何とかできないか。ある地域では駅前の活性化に活用しようと、若者にオープンスペースを開放した事例がある。すると広がりをもって人の交流ができた。若者の力はこういうことだと駅前の活性化という目に見える形になった。社会教育施設的に見て現状から見るアプローチはどうかと思う。

委員：芸術的なものを中心として計画を立てていく形で見ていると思う。教育的な観点でなく、趣味的な感覚で芸術文化をとらえていると思う。その面だけを見て計画を立てるのがいいのか懸念している。今の若い人は紙媒体ではなく、スマホで情報を仕入れている人が多い。計画の中に見通しで入れておく必要があると思う。人と人のつながりもそうだが、ジャンルはジャンルで仲間を作ってやりとりしている。地域だけでなく、日本各地でグループづくりをしている。それを何とかこの計画に活用できないかと思う。

委員：つるおか文化部ミーティングとアンケート、細かにやっていて、色々な意見が吸い上げられている。アンケートで鶴岡市の文化と芸術の特徴を聞いている部分がある。食文化や文化財、伝統芸能は他の市と違い市民が大事にしている。伝統や食文化、文化財が大切にされていると感じているのは他の市と比べても特徴的。一方であまり思わない、まったく思わない、の回答が多かった二つの設問、(3)「大人になってから趣味や習い事に気軽に親しめる」(6)「公演や展示、練習できる施設が

充実している」は、表現は違うが似た現状の表と裏の設問になっている。やりたい気持ちに対し、できない理由として場所や機会がないという話。高校の文化部のアンケートでは、社会人になっても今の活動を機会があれば続けたいという意見もある。気軽に練習できる場というのをどう提供していくのかが鶴岡市の一つの道筋ではないか。一方でタクトという立派な施設がある。状況を考えると若い人に優先的に貸し出すような、仕組みを作るだけでもだいぶ変わってくると思う。このようなことをフィードバックしていくと、より鶴岡らしい施策ができてくると思う。

委員：活動している方々が若者の力を欲しがっているが、若者はどう入り込めばいいかわからない、という接点は意外と目指すことができる分野ではないか。様々な段階や、タクトをどう活用するかを感じたところ。アンケートは、また検討していくと思うので、ここから見えるものは何かをもう少し吸い上げると見えやすいと思う。

【2】①過去から未来への見通しと計画の領域 ②現状の整理（事務局説明）

委員：8、9ページはこれまでの策定委員会の中で出てきた意見だと思う。これを具体的にしながら、計画の対象領域を踏まえて最終的には基本目標と重点項目に入っていくことになる。8、9ページに対して、皆さんからご意見をいただきたい。

委員：8、9ページを踏まえて対象領域を設定し、現状の整理と整合性を見ていくと、対象領域と現状の整理の乖離がある。高尚にまとめているが、一般の人の考えは生活文化に根差しているので、なぜピントが合わなくなるのかと思った時、（8-9ページの）鶴岡市が育ててきたものの中に、鶴岡の「人」が入っていない。思想は入っているが人の営みや社会生活が入っていない。文化芸術にかかわるどんな人が未来にどうなりたいのかという視点をいれるとうまくいくのではないか。

なぜそうなったかと思うと、12ページの山形県の基本目標に県民一人ひとりが文化活動の主役になり…、といった部分を読んだときに、主役の人たちがいないまま作ってきたものだけが独り歩きしている気がした。

委員：表現の仕方が難しいところがある。文化を作ってきたのは人間だが、歴史の中で重なり合いながら出来上がったものは地域の風土を生む。

委員：家を建てるにしてもどんな考え方の人が建てるかで出来上がる形は違う。鶴岡で生きて庄内で暮らし文化芸術に携わる私たちがどういう人格を目指すか、という視点が入ると現状の整理とアンケートの声とうまく整合していくのではないかと思う。

委員：悩ましいのが「沈潜の風」。観光的には鶴岡の人間のアイデンティティをきちんと伝えないといけない。今生きている人に会いたい、知りたいという気持ちになったとき、我々の気質を自慢するのではないが、分かるようにしてほしい。

委員：「沈潜の風」は計画書の中では自画自賛にならないようにとらえないといけない。「沈潜の風」と文化の関係は過度な干渉を避けるという効果が大きいと思う。俺

は俺、あいつはあいつ、ただし、とことんやるぜといったところで気風が効いてくる。そういった意味を含めた表現だと、沈潜の風と文化との関わりが説明可能だ。下の年表的な図解の縦軸の斜度がついている部分がだんだん広がっていくが、縦軸は何と思えばいいのか。

事務局：鶴岡がこれまで受け入れてきて消化してきた文化的なもの、芸術的なもの。

委員：日本語はあいまいなところがあるので、できれば和英併記の計画書にできるという。英語で言うと何かということ意識してもらってここの議論もクリアできると思う。文化の蓄積ならわかるが、文化の程度といった軸でとらえると、果たして縄文文化が今の文化に劣るかというふうには考えないといけない。

事務局：鶴岡の地域圏で消化してきた、次の世代に引き継いでいける文化的なもの芸術的なもの、が積み上がっていくイメージで作っている。

委員：言葉の使い方だが、積み重ねてきたもの、引き継ぐべきもの、次世代への継承と言われたら、「もの」というのはあいまいになってしまう。

委員：右肩上がりになっているが、網掛けの帯は出羽三山の信仰も黒川能も地層としてみていた。時代を経るごとに新しい文化芸術的なものが入ってきてどう許容していくのか。同時にどれだけ過去のもを入れ込むことができるか。代表的なものにとらえ方とつながりが難しい。地層的なものに穴を掘ってつなげていくようなもの。そこがうまく表現できれば面白い。未来志向をとらえられえるように踏み込んでいきたい。また伝統を引き継ぐと守ると言い方。伝統を守ったら必ず消滅する。守るではなく引き継ぐ、時代とともに変化しながら、引き継いでいくこと。

委員：年表の網掛けの部分は文化の地層ととらえた。鶴岡らしいと思う。他の都市の文化振興計画で出羽三山信仰とか、黒川能がこれだけ出てくるのもそうそうないだろう。鶴岡らしい計画になるいいページになる気がしていた。

委員：10～11ページ。計画の対象領域は具体的になっていくものだと思う。

委員：これから生まれてくる未知のものも対象領域とするという理解でいいのか。

事務局：そのように考えている。

委員：鶴岡独自の気風に関連して、生活文化とかもっと具体的に出てきてもいい法に示された部分で工芸を落とさないほうがいい。デザインなど新しく出てくる、映像文化とか、いろいろな文化がある。

委員：メディア的ものはこれからどんどん出てくる。これから出てくるものも含めて具体的に示しておくことはどうか。

委員：伝統工芸などは消えかかっているものもある。それらの伝統を受け継ぎながら、デザイン、映像的に記録するなど新しい展開をとらえられるようにしてほしい。

委員：法で示されている中に漫才など鶴岡にはないものもある。それらがすべて含まれている。今まであったものは出してもいいと思う。

委員：未来に向けて考えられるすべてのものを出してみるのはいかがでしょうか。

委員：そうしたら方言も入る。

委員：出してみたときにそこから収束させるのは無理か。

委員：どの時点で見ると、だれが見るかが定まっていない。

委員：文化芸術という言葉を選択するときに、主だったものプラス生活文化的なものを網羅している。過去、現在、未来の中で考えられるもの。今消えつつあるようなもの、続けてほしいものをとらえた時、どういうものが生まれるのか、個人的に興味がある。黒川能では、酒樽を作る職人がいなくなって困っている。一貫目蠟燭も昔は鶴岡で作っていたが今は外に発注している。未来に向けて考えられる文化芸術というものを具体化された言葉があってもいいと思う。

委員：計画を立てるための範囲と考えたほうがいい。失われたものの復活はだれがやるのかという話になる。

委員：法に示された項目とこれからの項目が時間軸で記述を踏まえて、推進計画はどうだという形にしたほうが分かりやすいかもしれない。市民の皆さんにお話ししたときにこういったものもあったのだというところが分かってもらえたらいい。

委員：文化という言葉はどうとらえるかでその先のアウトプットがイメージできる。鶴岡市が取り組んでいくことを考えると私たちが続けてきて、残っていて、いろいろな意味で耐久性があって、歴史があると、文化に連なるのではないか。

委員：過去はあるがそこから鶴岡ではこれをやっていくというのは見えやすい。そのようなとらえ方をしてほしい。

委員：柔軟だと思うし、幅が出てくる。

委員：だれが何をどうやってやるのかを見せてくるようにしたい。行政がやること、市民が主体的にやること、それがはっきりと分かるように。行政への要望ばかりにならないようにしたい。

委員：次に現状の整理について。(1)はやっている側と(やりたい側)の差をどう埋めるか方策を考えていくことが必要。(2)に関しては、地域には協力をするという言葉がある。鶴岡の奥(山間部)では結(ゆい)と言い黒川では合力(ごうりき)という。表現として「力を貸しあわないと、力を発揮できない」「力の貸し合い」という言葉が面白いと思った。やさしくわかりやすく、力強さを感じる。(3)はもっと具体的な施設や整備の話、障害者や高齢者のつながりで、どう具体化していくかを含む。

委員：芸文協という立派な組織があるが、どこでだれがどんな活動をやっているのか把握できていない。参加したい方が出にくいことにもつながっているのではないかと。現状を整理して可視化できるといい。

委員：現実にはいろいろな活動があるが、意外と知られていない。可視化できると違ってくる。現状の整理と対象領域は必ず後でまたぶつかってくる部分なので、ここで終わらせてもらって、12～13ページを時間のゆるす限りやっていきたい。

【2】 ①基本目標（今回は空欄） ②重点項目（事務局説明）

委員：重点項目は過不足な部分も混在している部分もあると思う。はじめに、基本目標の表示の仕方や内容について、重点項目の抑え方について、お聞きしたい。

委員：今は重点項目よりも具体的な項目を徹底的に議論していくのが現実的な議論になると思う。必要な項目やよりよい表現を含めて何が鶴岡にとって必要なのか、鶴岡で特化しているのかデータを出すことが必要だと思う。

委員：基本目標はモットー的なものになると思う。重点項目が計画書の章を立てる時に、あてはまるような感じがいいとすれば、項目が独立しているほうが議論が進みやすい。

例えば「伝統的なものをどうするか」「これから創造するものをどうするか」「交流、まじりあい、伝統的なものと将来的なもの、鶴岡のものと鶴岡以外の異文化のまじりあい」の3項目ぐらいが分かりやすい。それぞれの章に活性化、連携、仕組みづくりといったキーワードがあるというのが落ち着ける場の一つだと思う。

委員：仕組みづくりに「共生社会の推進」という福祉の視点が入っている。障害のある方々の文化の中で、自立した生活を続けるけど文化芸術活動にどう参加するかということに取り込まれているのだと思う。今までは交通アクセス、段差の開放、もしくは手話といった配慮は当然やられてきているが、この計画ではそういった方々が更に芸術をやりたい、文化活動にふれたい、といったとき、どうつなげるか、フォローするかまで踏み込んでいくべきだと思う。合理的配慮だけでなく、「個」にどのような支援が必要か、「個」でなくても、例えば青年教室といった障害者の方が活動するグループ、社会で生活する上で学びの場がある。そこで実は文化活動をしているがそこでとどまっている。それをどう支援するか、光っているものを引き出して、障害者の方を地域でどのように、共生社会でとらえていくかが現状だと思う。合理的配慮は深いところでは本人がそこで生活をする上で求められたりする芸術文化をどう支援していくのか、情報の提供や場の設定であったり、指導などになってくると思うし、国はそこまで求めていると思う。簡単にあらゆる人への文化活動の支援とまとめているが、そこを掘り下げてほしい。仕組みづくりの3に、質の高いボランティア活動とあるが、質の高いとはどうなのか、ボランティアは個から発信している。専門性が高いではなく、質が高いということが少し引かかった。

委員：重点目標は全部がつながってくるので先般出た総合計画や、市民憲章もあるので、そのへんからいいアイデアが浮かばないかと思う。④の独自の文化の継承というところで、鶴岡の気風を継承するとあるが気風は時代でも変わるし、今までの気風をそのまま継承すべきだとは思わない。どういうキーワードがあるのか、もう少し考えてみたい。

委員：重点項目は、具体的にはこの先にどのようなことをするのか、用意されるとこの項目でいいのか参考になると思う。この先に具体的にどんなことをしていきたいのか、しようとするところがあるのかが分ると分かりやすい。

委員：12～13ページは次回またご用意いただくことになると思う。今まで出た意見を参考にさせていただきながら、もう少し重点項目、基本目標を見直しながら作り上げていく形で次回にお示ししていただくことでお願いしたい。